

世の中にはこんな本があったのか！ 強烈な 読書体験の薦め。小冊子 “危険な漫画”付。

# BRUTUS®

人生変えちゃうかもしれないあの1冊。

2018 1/1・15 合併号 特別定価 680円

## 危険な読書

校閲済

## 山の怪談。

### 都会で怪談は生まれない？ 異界への扉が残る日本の山。

山の怪談本が人気だ。火つけ役はマタギラの不思議体験をまとめた『山怪』で、登山をしない読者を多く取り込み、山岳書籍としては異例のヒットとなった。

日本人は怖い話が好きだ。江戸の庶民は百物語に熱中したというし、昭和の小学生はトイレの花子さんや口裂け女に怯えた。しかしなぜ今、山の怪談なのか。

山の怪現象が起こるのは夜に限らない。昼でも濃霧や雪に包まれたとき、人は自分がどこにいるのかわからなくなる。そんなとき不思議なモノがやってくる。間や霧の中に、異界へと続く扉が現れる。

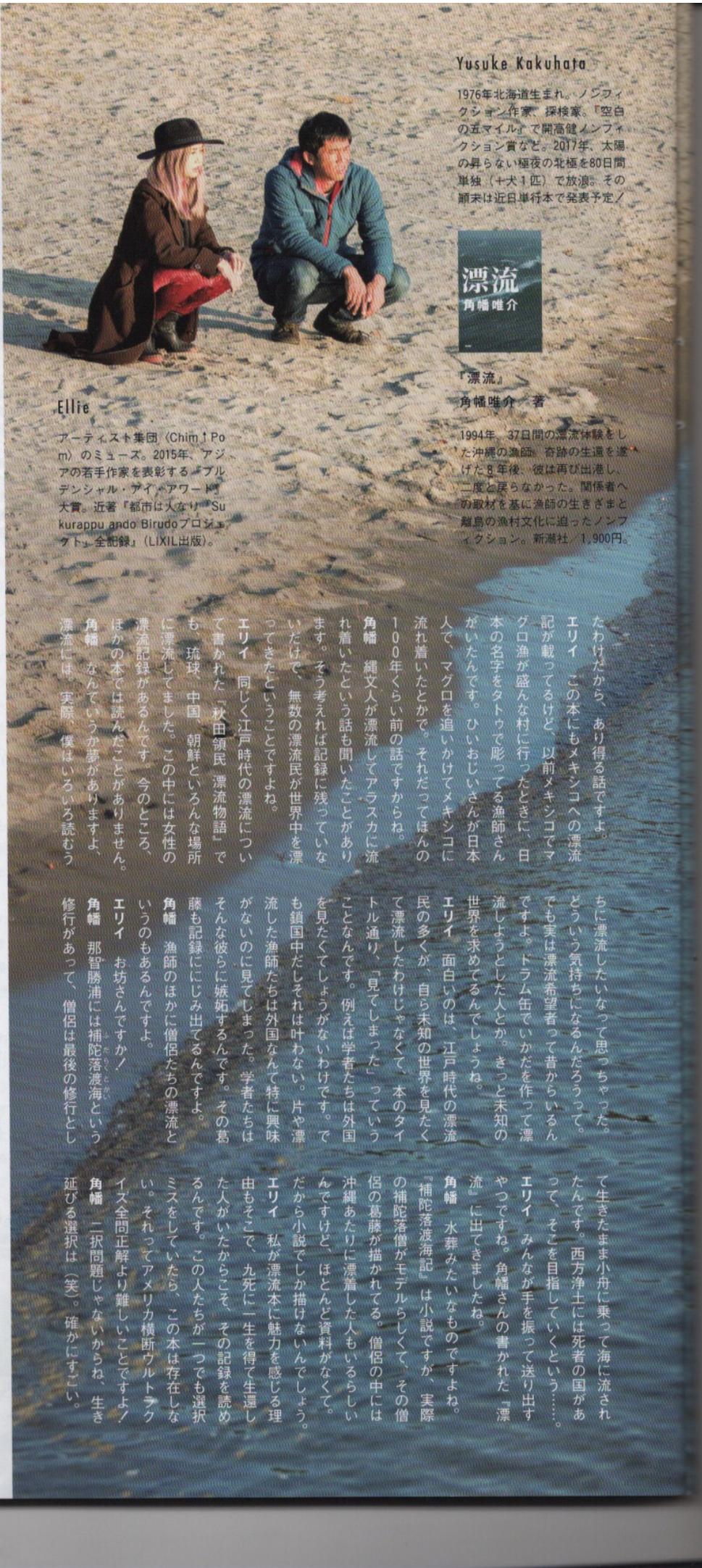
『山怪』に登場するマタギたちはそんなとき、「狐に化かされた」と言う。『黒部の山賊』は戦後すぐ、人跡未踏の北アルプス山中に暮らした山小屋主人の体験談だが、次々と起こる摩訶不思議な出来事は、「物の怪」たちの仕業であると語られる。それらは古くても70年ほど前のこと。が、驚くなかれ、今でも山小屋へ行けば同じような話が出てくるし、登山者の中にも不思議な体験談を持つ人は多い。

山は変わらない。都会から暗闇が消え、物の怪たちが潜む場所が失われても、山の夜は変わらず真っ暗闇で、そこそこに人間以外の気配がある（気がする）。現代にあって山は怪談を生み出すことのできる唯一の場所なのかもしれない。だいたいネオンが煌々と灯る街に幽霊が出るのと聞いても、そんなのちっとも怖くない。



#### 今も現役/ 山の物の怪たちに会える本。

左から、『山怪 山人が語る不思議な話』田中康弘/著。各地の山で暮らす人々から聞いた山の奇妙な体験談集。山と溪谷社/1,200円。『定本 黒部の山賊 アルプスの怪』伊藤正一/著。戦後すぐ、人跡未踏だった黒部源流域を開拓し山小屋建設に奮闘した著者。その間、山で体験した摩訶不思議な体験を綴る。山と溪谷社/1,200円。『疲労凍死/天幕の話』平山三男/著。『天幕の話』は登山者たちが遭遇した山の奇譚集。前編の『疲労凍死』はかつて那須連山で実際に起こった大量遭難事件をテーマにした小説。山と溪谷社/1,700円。



Yusuke Kakuha

1976年北海道生まれ。ノンフィクション作家、探検家。『空白の五マイル』で開高健ノンフィクション賞など。2017年、太陽の昇らない極夜の北極を80日間単独（十人1匹）で放浪。その顛末は近日単行本で発表予定/



『漂流』  
角嶋唯介 著

1994年、37日間の漂流体験をした沖縄の漁師。奇跡の生還を遂げた8年後、彼は再び出港し、二度と戻らなかった。関係者への取材を基に漁師の生きざまと離島の漁村文化に迫ったノンフィクション。新潮社、1,900円。

Ellie

アーティスト集団（Chim! Pm）のミュージシャン。2015年、アジアの若手作家を表彰する「ブルデンシャル・アイ・アワード」大賞。近著『都市は人なり』Sukurappu ando Birudoプロジェクト。全記録』（LIXIL出版）。

たわけだから、あり得る話ですよ。エリー この本にもメキシコへの漂流記が載ってるけど、以前メキシコでマグロ漁が盛んな村に行つたときに、日本の名字をタトウで彫ってる漁師さんがいたんです。ひいおじいさんが日本人で、マグロを追いかけてメキシコに流れ着いたとかで、それだつてほんの100年くらい前の話ですからね。角嶋 縄文人が漂流してアラスカに流れ着いたという話も聞いたことがありますが、そう考えれば記録に残ってないだけで、無数の漂流民が世界中を漂つてきたということですよ。エリー 同じく江戸時代の漂流について書かれた『秋田領民 漂流物語』でも、琉球・中国・朝鮮といろんな場所に漂流してました。この中には女性の漂流記録があるんです。今のところ、ほかの本では読んだことがありません。角嶋 なんていうか夢がありますよ、漂流には、実際、僕はいろいろ読むう

ちに漂流したいなって思っちゃった。こういう気持ちになるんだろうって。でも実は漂流希望者って昔からいるんですよ。ドラム缶でいかだを作って漂流しようとした人とか。きっと未知の世界を求めてるんでしょうね。エリー 面白いのは、江戸時代の漂流民の多くが、自ら未知の世界を見たくて漂流したわけじゃなくて、本のタイトル通り、「見てしまった」っていうことなんです。例えば学者たちは外国を見たくてしょうがないわけです。でも鎖国中だしそれは叶わない。片や漂流した漁師たちは外国なんて特に興味がないのに見てしまった。学者たちはそんな彼らに嫉妬するんです。その葛藤も記録ににじみ出てるんですよ。角嶋 漁師のほかに僧侶たちの漂流というのもあるんですよ。エリー お坊さんですか？角嶋 那智勝浦には捕陀落渡海という修行があつて、僧侶は最後の修行とし

て生きたまま小舟に乗って海に流されたんです。西方浄土には死者の国があつて、そこを目指していくという……。エリー みんなが手を振って送り出すやつですね。角嶋さんの書かれた『漂流』に出てきましたね。角嶋 水葬みたいなものですよ。『捕陀落渡海記』は小説ですが、実際の捕陀落僧がモデルらしくて、その僧侶の葛藤が描かれてる。僧侶の中には沖繩あたりに漂着した人もいるらしいんですけど、ほとんど資料がなくて、だから小説でしか描けないんですよ。エリー 私が漂流本に魅力を感じる理由もそこで、九死に一生を得て生還した人がいたからこそ、その記録を読めるんです。この人たちが一つでも選択ミスをしていたら、この本は存在しない。それってアメリカ横断ウルトラクイズ全問正解より難しいことですよ。角嶋 二択問題じゃないからね、生き延びる選択は（笑）。確かにすい。

# 極限状態、漂流文学。



角幡唯介



エリイ

危険な読書

## 動きようのない漂流は究極の超日常世界。

沖縄で起きた漂流事件取材し、ノンフィクション作品『漂流』を発表した角幡唯介さん。アーティスト集団「3MON POE」のエリイさんが「最近、漂流モノにとハマリ中」という噂を聞き、異色の対談を敢行することに。2人を魅了する漂流文学の魅力とは？

エリイ 私、まだ漂流初心者なので、今日はよろしくお願いします。  
 角幡唯介 エリイさんが漂流本にハマったきっかけは何だったんですか？  
 エリイ 私、本を読むスピードが遅いので、ネットで信頼できそうなレビューをしている方を探して、その方のおすすめの本の中から面白そうなものを買ったんです。ハズレもあるなかで当たりだった一冊が「世界を見てしまった男たち」。目下、人生ハズレの本です。  
 角幡 タイトルが気になったの？  
 エリイ 鎖国時代の漂流というのを初めて見て、この本には自分の知らない出来事があるに違いないと。船

が難破して、世界中に漂流してしまっただちの話なんですけど、注目したのはキリシタン禁制時代の漂流。当時、罪人の流刑地だった八丈島近くにある島島に漂着した人たちの記録もあって、角幡 鳥島は日本の漂流の正音ですか？  
 エリイ この本でも何人も漂着して、前に漂着した人が島を生き延びる術を書き残してくれてたりするんです。  
 角幡 鳥島はアホウトリの宮異地だから、それを捕まえて食べてればけっこう生き延びられるとかって。  
 エリイ 長い人だと20年ほど島で生活してたり、しばらくすると、新しい漂着民が辿り着いたりするんです。  
 角幡 仲間になって、一緒に船を作ったって話も聞かれますね。  
 エリイ その船の作り方も面白いんですよ。木が生えない島だから、6年もかけて流木を集めたり、海に落ちてた錨から釘を作ったりして超スコイ。

角幡 僕は冒険の本も読むんだけど、遭難しかかって、そこから生き延びていく話が一番面白いんですよ。漂流はその究極形態、超日常的な体験だから。  
 エリイ 生き延びる話でいうと、以前「生きてこそ」という雪山で飛行機が墜落する映画を観て衝撃を受けて。最後は死んだ仲間の肉を食べて生き延びるんですけど、死んだ友達が食料になる瞬間があるという……。  
 角幡 極限状態で見える人間の生命力の強さですね。特に漂流はそれがよく



エリイさんの希望を感じる漂流本2冊。



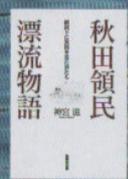
『世界を見てしまった男たち 江戸の異郷体験』  
 春名徹 著  
 機組もの漂流者が流れ着いた絶海の孤島・鳥島をはじめ、江戸時代、鎖国下の日本において漂流し、意図せず異郷の地を踏んだ人々の苦難と驚きに満ちた冒険と体験を綴ったノンフィクション。ちくま文庫/品切れ。



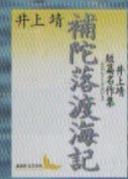
角幡唯介さんの絶望連続の漂流本2冊。



『大西大洋漂流76日間』  
 スティーヴン・キャラハン 著  
 長辻象平 訳  
 1982年、嵐の大西洋上で沈没した小型ヨット。救命いかだに逃れたヨットマンは飢えと渴きと戦いつつ、知恵をこらして命をつなぐ。76日という漂流生活から奇跡の生還を果たした極限の手記。ハヤカワ文庫NF/900円。



『秋田領民 漂流物語』  
 神宮滋 著  
 これまで断片的にしか伝えられることのなかった江戸時代の秋田人の漂流記。琉球、蝦夷、中国、朝鮮国……。異国異境へ流れ着き、九死に一生を得て帰国した者たちの感動の記録。歴史的にも珍しい、女性の漂流体験も収録。無明舎出版/1,700円。



『補陀落渡海記』  
 井上靖 著  
 熊野補陀落寺の住職に伝わる渡海上人の習わし。それは61歳の11月に生きながらにして海に出て観音淨土を目指すという修行。いわば絶対に逃れられない、死への漂流。実際の僧侶をモデルに、死に向かう恐怖と葛藤を描く。講談社文芸文庫/1,300円。

り浮き彫りになる。例えば登山なら自力でその場を切り抜ける努力ができるけど、海で漂流したら動きようがないし、できても釣り程度であとは運任せ。その状況がすこいって思うんです。  
 エリイ 鳥島に漂着した人たちはも船で脱出した方がいいものの、現在地がわからないから、おみくじで方角とか決めて(笑)。このあたりの時代のほかの漂流者もおみくじを使っていたようです。エリイ 自分の命をコントロールできなくてという状況下で、でもそこを生き

延びる人が稀にいる。鳥島から生還した人も、船を作る技術や高い自活能力を持っていたから生き延びられた。今の人間には到底ない生命力ですよ。  
 エリイ 私とかすぐ死んじゃう(笑)。  
 あるのは希望か、絶望か。漂流本が伝える人間の力。

角幡 『大西大洋漂流76日間』のヨットマンもすこい。大西洋を救命ボートで漂流するんですけど、割り箸みたいなもので太陽の角度を測る道具を作って現在地の推測をしたりして、普通なら絶対に生き残れない日数を生き延びるんです。それでも救助が来るかわからないわけですから、絶望の連続です。  
 エリイ 世界中を漂流してしまっただちでも、命からがら日本に帰っても大砲を撃たれて上陸できず、結局異国の地で一生を過ごすことになった人もいて。鎖国時代だけでも1年に何人も漂流者がいて、通算したら今までに何十万という人が漂流してる。その中の生還者がわかってるだけで30人程度ですから、やっぱり私はこの人たちには特別な希望を感じます。

角幡 僕は「漂流」を書くにあたって、実際に漂流して行方不明になった漁師の関係者に取材したんですが、驚いたことに今も海で行方不明になる人が大勢いるんです。「あの人もいなくなっちゃったよ」とみたいな感じで。江戸時代ならまだしも、現代でも漂流者がいるっていうのは衝撃でした。海って本質的には何も変わらないんだなって。  
 エリイ その人たちももしかしたらどこかの島で生きてるかもしれませぬね。角幡 鳥島の漂着民は20年も生き延び